

## 【要旨】

筆者は建築家を両親に持ち、建築のドローイングや模型、絵画や写真が身近にあった。幼少期から描くことを愛好するとともに、しばしば自作を他者に贈呈し、その絵画が相手の生活空間に入り込む様子を想像していた。鑑賞者の生活環境のなかに置かれた「絵画」がいかなる存在か、それが筆者自身の創作にいかなる影響を与えたかを考察する。

絵画作品の鑑賞は、美術館などの光、温度、距離、音などが整えられ、多数の来館者向けに作り上げられた環境で鑑賞することが標準的な方法である。その一方で、絵画鑑賞の環境を過剰に整えた状況にすることは、時として、作品との距離を鑑賞者に感じさせることもある。筆者は、美術館という整えられた場での鑑賞を超えて、より日常的なシチュエーションのなかに絵画があってもよいのではないかと思う。この感覚は、自身の作品制作の原動力の一つとなっていることを、本論の準備段階で自覚することとなった。

筆者は、不特定多数の人に向けた展示室空間とは別種の、より個人的、私的な空間で見る人の生活時間の一部になるような絵画の在り方も存在する、と想定している。このような「生活とともにある絵画」の在り方を考察することにより、日常の中の絵画を制作するための手法分析とその理念の拡張を試みるのが本論の目的である。

本論文は4章構成で論述する。

第1章「中心から集合へ」では、自作品と手法の変遷を考察する。

第1節、第2節では、主役に焦点が当てられた表現から再構成による表現へ移行する過程を分析する。

第3節では、記憶と空気感の取り込みを目指した時間軸を含んだ再構成による「脱領域化」を考察する。「脱領域化」とは、時間軸を含んだ再構成が行われた結果、視覚として認識できる領域の持つ表現から、時間領域の持つ表現を重視する方向へと移行した状況を自ら定義した表現である。この「脱領域化」により、視覚的・時間感覚的なゆらぎの発生によって鑑賞者との本質的な「交感」が起こることを示すと同時に、さらに主題設定が分散的な要素の集合体へと移行していった過程に注目する。

第2章「反復と集積」では、「脱領域化」の端緒となった「形の反復」と「手作業の集積」が現在の制作の基盤になっていることを示す。

第1節では、自作品の中の「反復」されるモチーフとともに、西洋美術史上の事例として新印象主義・ナビ派らを参照し、また、日本美術の事例として尾形光琳、伊藤若冲、福田平八郎らを取り、「反復」による対象の断片化と、新たに秩序立てられた平面性について述べる。

第2節では、自作品の中に繰り返す作業の集積が生む時間性を分析し、オールオーバー的表現への流れを示す。また、ジャクソン・ポロック、草間彌生らの作品を参照し、集積から発生

する表現の「オールオーバー」的性質について自身の芸術表現との接続可能性を考察する。

第3章「生活空間を構成する絵画」では、第1章で述べた過去の制作を踏まえ、現在の制作での意識を言語化し、絵画に登場する「窓」の特性について分析を行う。

第1節では、アルベルティの透視図法から続く外界を描きとろうとする伝統的な窓性に比較して、ハマスホイ、マティス、マグリットらの近代絵画に見出される新たな窓性について論じる。

第2節では、筆者の制作へのモチベーションである絵画作品を室内空間に置くことについて、絵画における室内表現の歴史的事例を、純粹かつ抽象的な「絵画」として扱ったマレーヴィチらやバウハウスなどを参照し、生活空間、鑑賞者との共振関係について論じる。

第4章「提出作品」では、近年の筆者のモチーフ「ガラス」と「格子」が、前章で述べた室内空間における絵画の役割へと繋がる論理について考察する。

第1節では、「ガラス」の表現において、映像に生じている歪み・反復されたモチーフが等価物として均質に提示される現象を分析する。さらに、このガラスを、実物性を減少させた存在として描写することによって「主張しない絵画」という特性が獲得されている自作の表現を検証する。

第2節では、「格子」の表現に着目し、その画面上の効果を分析する。そこに見出されるのは平面性ととも奥行き強調、また、この格子によって隠された「見えない部分」への視覚的な欲望の喚起を検証し、そこから生じる価値の転換について考察する。

第3節では、筆者の提出作品と、上記のこれまでの自作の分析との関係性を提示する。筆者が上記にまとめた様々な手法、そしてそれによって生み出される自作の意味・作用、さらに「窓」「格子」の意味性を検証する。そして、これらの表現が喚起する鑑賞者に向けたアプローチの拡張性について検証する。

終章では今後の課題と展望を示し、結論とした。